

<書評>

『1492年のマリア』（西垣通・著）

河島茂生

コンピュータが生活環境に入ってきている。パソコンも一人一台の時代に入った。だが、そこに付いて回る印象は最先端というイメージである。大学の講義でも、有限オートマトン (finite automaton) やチューリングマシン (turing machine) の仕組みなどが情報科学の基礎として触れられるが、そのコンピュータへと連綿と連なるコスモロジー (cosmology) が解説されることはない。

しかし、著者の西垣通は、その執筆活動を開始してから、コンピュータの礎になっているコスモロジーを問題にしてきた。『秘術としてのAI思考』では、キケロ記憶術、ルルス結合術、ブルーノ哲学記憶術、マニエリスム芸術などの系譜に人工知能 (artificial intelligence) を据え、一貫してそのコスモロジーを扱っている。『聖なるヴァーチャル・リアリティ』でも、情報工学者フィリップ・ケオアの議論の根底にあるコスモロジーを問題にしている。

そんな著者が、「現在」に向き合うために「歴史小説」というかたちをとって執筆した作品が『1492年のマリア』である。その基点は、やはりコスモロジーであるといってよいだろう。今回は、ルルスの「大いなる普遍の術」がそれにあたる。

「大いなる普遍の術」は、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教をまたぐ普遍概念を設定し、その組み合わせによって宇宙の真理を見出す術である。その術をもってすれば、宗教間の隔たりは解消されて宇宙の共通認識に辿り着くことができることとされた。「大いなる普遍の術」は、複雑であり、とても万人が頭のみで正しく操れるものではない。そのため、この術の補助道具として、「円盤機械」や種々の図表が使われた。円盤機械は、宇宙の基本概念やその関係概念などが表現されている装置であり、ルルスによれば、その機械を操作するこ

とで、不完全な人間であっても宇宙の真理を見出しえる。この円盤機械は、現代のコンピュータと同じく形式的な概念を組み合わせるゆえ、現代のコンピュータの先駆として位置づけられた。

『1492年のマリア』の物語は、この「大いなる普遍の術」を基底としながら進んでいく。本書の題目に含まれている「1492年」は、イサベル＝フェルナンド両王がユダヤ人追放令を公布・施行した年であり、また、コロン（コロンブス）が西廻りインド航海に出発した年である。そして、なにより、グローバリゼーションの端緒として「大いなる普遍の術」が海を渡った年である。この年に向けて、物語は展開していく。

主要登場人物は、コロン、そして、幼なじみの3人アロンソ、マリア、ロドリゴの4名である。この登場人物たちに、政治や権力、金銭、宗教、理想、愛憎、欲望などが複雑に絡み合っていく。コロンは新大陸に夢を見て西回りインド航海へと旅立った。アロンソはルルス秘術をもって悟りをひらき、キリスト教の伝道に歩み始めた。マリアは、アロンソを愛しアロンソのために身を捧げた。ロドリゴは、ひたすら権力を愛し、人を欺いてでも権力を掴もうとした。

物語は「ねじれ」に帰結していく。「伝道者として生きようと欲しながらも、実際には残酷な統治者として生きてしまうこと」、「神的な愛の術の創始者として生きようと欲しながらも、実際には人間の支配力を増す世俗的魔術の創始者として生きてしまうこと」、そして、さらにもう一つの「ねじれ」がある。このねじれについては、『1492年のマリア』を実際に読んでもらいたい。

西垣通の研究営為は、コンピュータのコスモロジーに注がれている。コンピュータの有用性だけが声高に叫ばれている今日、西垣のコンピュータの本質を見定めようとする研究姿勢こそが求められているのではないだろうか。（了）

関連文献

西垣通(1990) 『秘術としてのA I 思考』 筑摩書房

西垣通(1995) 『聖なるヴァーチャル・リアリティ』 岩波書店